

赤ちゃんの頭のかたち外来1年 病気の有無をまず判断



矯正ヘルメット治療は約半数が希望



赤ちゃんの頭のかたち外来1年 脳神経外科と小児科が連携

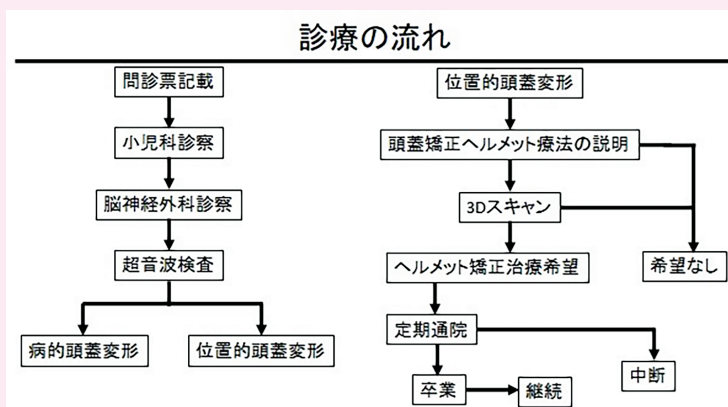
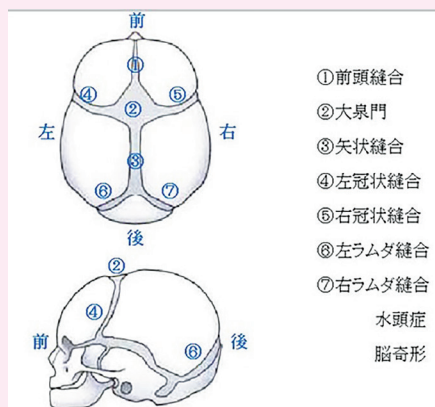
近年、赤ちゃんの頭のかたちに関する注目度が高まっています。それに伴い、大都市部では赤ちゃんの頭のかたちに対応する専門の外来やクリニックも開設されている状況です。広島大学病院では昨年8月から脳神経外科と小児科が一緒になって「赤ちゃんの頭のかたち外来」をスタートさせました。脳神経外科の山崎文之准教授と、小児科の早川誠一診療講師に話を聞きました。

■ 無害な超音波で頭蓋骨縫合を検査

赤ちゃんの頭蓋骨は、出生時は骨同士がくっついておらず、七つの骨に分かれています。骨と骨の間には縫合線と呼ばれるすき間があります。生まれたばかりの赤ちゃんは、このすき間の部分が閉じておらず、一番大きなおでこの上にあるひし形のすき間「大泉門」から縦横に縫合線が延びています。これは6か月までに出生時の2倍の大きさにもなる、急激に成長する脳に対応するためです。縫合線は成長とともに徐々に閉じていきます。ただし、通常のタイミングよりも縫合線が早く閉じてしまう病気があり、これを「頭蓋縫合早期癒合症」と呼び、頭のかたちの変形の原因となります。



頭蓋縫合早期癒合症では、一箇所だけの縫合線の閉鎖では変形だけのことが多いですが、複数の縫合線が閉鎖してしまうと成長に伴って期待される頭蓋骨の拡大が阻害されます。脳を覆う頭蓋容積が狭くなり、脳の成長が障害されるため、治療が必要になります。癒合した縫合線を切断などの手術が治療の中心になります。頭のかたち外来はこのような病気を早期に発見することが大きな目的の一つになります。病気ではなく赤ちゃんの向きグセが原因となっている場合は、位置的頭蓋変形と診断され、左右が非対称になる斜頭症、前後が短くなりハチが張って絶壁などと言われる短頭症、前後が長くなる長頭症があります。



■ ヘルメット生後3、4カ月で最大効果期待

本院では、患者さんはかかりつけ医からの紹介で訪れます。問診票を基に小児科、脳神経外科で診察、超音波検査で頭蓋骨を確認していきます。通常はレントゲン検査を行いますが、本院ではX線被曝などの影響を考慮し、体に害のない超音波での検査を実施しています。赤ちゃんの大泉門から脳内の病気の有無を確認した後、前頭縫合、矢状縫合、両側の冠状縫合、両側の人字縫合、必要に応じて鱗状縫合の癒合状態を確認し、病気かどうかを診断します。これまでの研究により超音波検査で十分な診断が可能とされています。両診療科が連携して評価します。病的なゆがみではないと診断されると、ゆがみの程度などにより、オーダーメイドのヘルメットでの矯正治療を行うかどうか相談することになります。位置的頭蓋変形は病気ではなく、外見の改善が目的のため保険治療ではなく自費治療(49.5万円+診察料)となります。ヘルメットをつくるために頭部をストロボフラッシュにより3Dスキャンして正確な形を取り、矯正したい形に合わせてオーダーメイドで作成します。2週間後からヘルメット療法が開始となり、約4週間ごとに通院し、ヘルメットの装着状況やゆがみの改善度、皮膚の状態を確認し、約半年間前後の治療期間となります。

頭のかたち外来では、これまでに延べ245人が受診し、ほぼ半数にあたる121人がヘルメット療法を希望されました。ヘルメット治療はイメージ的には歯の矯正に近く、外見の改善が主目的となります。ゆがみの程度にもよりますが、ヘルメット矯正治療を行うかどうかは保護者の考え方によるところが大きいです。重症以上のケースではヘルメット治療を勧めています、「病気でないならよかった」と安心して希望されない方もいらっしゃいます。頭蓋骨の成長が顕著な生後3、4カ月ぐらまでに治療を始める方が大きな効果を期待できます。

■ セミナーで専門的な情報を共有

広島大学病院の赤ちゃんの頭のかたち外来では、この分野のエキスパートや治療を進めている病院などと連携、9月に「広島小児神経セミナー2023」を開催、会場とオンラインで約90人が参加しました。鹿児島大学と広島大学から周知が進むにつれて受診が増えている外来診療の状況などが報告されました。また、新たにリハビリテーション科とのかかわりも示されました。



2015年からヘルメット治療を進めてきた大阪府高槻市の高槻病院では、ヘルメット治療を希望しない場合や変形の程度が軽度である場合など、頭部の変形が軽減するように積極的体位変換(赤ちゃんとお母さんでするリハビリ)やタミータイム(うつぶせ遊び)の具体的な方法を指導していると報告、背中をゆっくりとなでるタクティールケアなども背中の緊張を緩める効果があるなどしました。本院でも今後はリハビリテーション科の理学療法士などと連携を取りながら、効果的なケアが可能かどうかなど検討を進めていきます。

脳神経外科の山崎准教授は「まずは頭のかたちのゆがみが病気によるものかどうかの鑑別が重要。歯の矯正と違って頭蓋骨の矯正は乳児期しか行えない。ヘルメット矯正治療により治せる変形と治りにくい変形は十分に説明をしますので、その上で治療を受けるか判断していただきたい」、小児科の早川誠一診療講師は「出生時より赤ちゃんに関わっている小児科医の役割は大きい。ヘルメット治療を始めるにしても、生後3、4カ月の早い段階での効果が大きく、乳児健診における頭のかたちの評価やご両親への説明は重要である。また、頭のかたち外来に紹介いただいた一部には合併症や発達遅滞に対して介入が必要な赤ちゃんが含まれており、適切な評価を行いフォローアップにつなげていきたい」としています。

ニュースアップ

インドネシア政府系の9病院と合意書に調印

インドネシア医療関連共同研究講座の一環としてインドネシア政府の保健省と政府系9病院の関係者が8月9日、広島大学病院を訪れ、医療協力にかかる合意書に調印しました。式にはインドネシアから約30人、広島大学側から約30人が出席しました。

越智光夫学長の「インドネシアと本学の関係では、昨年5月、広島大学同窓会インドネシア支部を設立し、現在も100人を超える留学生を受け入れています。今回の訪問で医療連携の具体化に向けたスタートを切ることを期待します」とするコメントを田中純子副学長が代読。インドネシア保健省のウィタ・ナーサント氏は「新型コロナウイルスの感染爆発をへて将来へのパンデミックへの備えが必要です。国民のヘルスケアの質向上へ広島大学病院と教育や研修を通じた協力がより発展することを願っています」とあいさつしました。田中副学長、工藤美樹病院長と保健省、9病院の代表者が合意書に調印しました。

この後、9病院がそれぞれ特徴や診療状況などを説明、協力の提案などもありました。広島大学病院側からは13診療科が現状や最新の治療法などを説明、両者の間で意見交換なども盛り上がりしました。



県立広島商高の生徒から 花の寄贈を受けました

県立広島商業高校の部活動「商業研究部LOSUVO FLOWER(ロサボフラワー)」から6月29日、広島大学病院へ花の寄贈を受けました。メンバーの生徒8人と教諭2人が訪れ、佐藤陽子看護部長らに花束を手渡しました。

同部活動では、地域の活性化へ向けた商品開発やイベントなどに取り組んでいます。その中で、新型コロナウイルス感染症の拡大で結婚式やイベントなどが中止になり、多くの花が使われず廃棄されることを知り、その花を活用して定額でのサブスクリプションサービスをスタートさせました。

今回は「医療関係者への感謝を込めて」ということで、ピンク、赤、黄色のガーベラを透明なフィルムで一輪ずつ丁寧にラッピング、約200本を届けていただきました。



キワニスクラブから 子どもたちへドール寄贈

子どもたちのための奉仕活動を行っている広島キワニスクラブから広島大学病院に入院中の子どもたちへと7月5日、「キワニスドール」30体を寄贈いただきました。ドールは身長約40センチ、白い無地の人形で、自由に顔などが描き込めたり、服を着せたりできるようにになっています。

贈呈式には広島キワニスクラブの上田みどり会長ら会員と人形作りにボランティアでかかわった大河公民館のメンバーら計10人が訪れました。上田会長は「未来を子どもたちへという大きな目標を掲げて活動。ドールを小さいころから子どもの近くにある存在にしてほしい」とあいさつしました。

病院側からは小児病棟の横田真由香師長が病棟の様子などを紹介、小児科の岡田賢教授が「入院中の子どもたちは命を懸けて病気と闘っている。ドールから勇気をいただいて子どもも喜ぶし、われわれも勇気づけられる」と感謝を述べました。



看護師 プラス

看護師の業務が拡大しています。「専門看護師」「認定看護師」は高度化・専門化が進む医療現場でレベルの高い看護を実践できる看護師に認められた資格です。いずれも日本看護協会が認定しています。

専門看護師は、看護師として5年以上の実践経験を持ち、看護系大学院で修士課程を修了して必要な単位を取得したのちに、専門看護師認定審査に合格することで取得できる資格で、13分野。認定看護師は、看護師として5年以上の実践経験を持ち、日本看護協会が定める600時間以上の認定看護師教育を修め、認定看護師認定審査に合格することで取得できる資格で、21分野です。それぞれの資格を持った看護師がどんな活動をしているのか、紹介していきます。



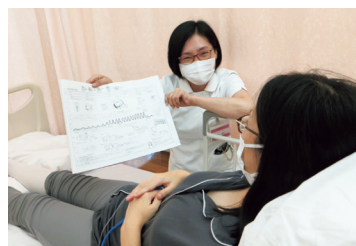
[専門看護師]
母性看護
井上 満美

01 どんな仕事？

周産期の女性を中心に全てのライフステージにある女性の健康をサポートするために身近な存在として活動しています。

私は主に病棟を中心として、妊産褥婦さんとその家族を対象とし、妊娠期から分娩・育児期まで関わり、看護を提供しています。妊娠～分娩～育児と各時期は線で繋がっていることを常に意識し、先の見通しや予測を立てて看護を検討しています。看護を提供する際は妊産褥婦さんの持っている力・強みに着目しセルフケアに向けた支援をしています。

当院は特にハイリスクの方が多いため、医師や他部門の看護師・患者支援部門とチームで医療・看護に当たります。その際には妊産褥婦さんの代弁者としてニーズや思い・先の見通し



についてチームで共有することを大事にしています。看護相談の依頼を受けて、他部署へ妊産褥婦さんが入院した際の看護上の課題や注意点について看護師からの相談対応をしたり、医師からの依頼で育児状況の査定を行ったり、具体的な育児方法について患者指導をすることもあります。病棟内の助産師の実践能力の向上に向けた教育支援として、自ら実践した看護を言語化し、ロールモデル的な役割を担っています。

02 きっかけは？

助産師として新卒で就職し6年目にさらに学習を深めたいと感じるようになり、専門看護師を目指しました。修了後、学びを臨床で生かすために復職しました。

03 将来へ向けて

母体救命救急や事例検討などの講師を担い、広島県内の母性看護・助産のより一層の質の向上を目指しています。助産師のスキルアップのため、ハイリスク妊産褥婦の看護についてシミュレーションやOJTでの教育活動を行っています。妊産褥婦さんとその家族が安全に安心して周産期を過ごせるように貢献していきたいと思っています。



[認定看護師]
集中ケア
林 容子

01 どんな仕事？

重症かつ集中治療を必要とする患者や家族への看護、いわゆる生命の危機状態にある方の看護

を行っています。身体的な視点だけではなく、生命の危機状態にある患者や家族の心理状態を分析し、評価するアセスメントを実施。倫理的視点を持ちながら患者中心の医療が実践できるように多職種と連携し、チーム医療を行っています。また、危機的な状況にあるクリティカルケア領域のみではなく、急変の可能性がある患者を早期に発見し、早期に介入できるようなRRS (Rapid Response System) 活動も行っています。



02 きっかけは？

上司からの勧めです。当時、クリティカルケア領域の認定看護師や専門看護師はおらず、根拠に基づいたケアや標準的なケアができていないか自信がありませんでした。そのため、集中ケア認定看護師教育課程でクリティカルケアについて学び、自信をもって看護を行いたいと思いました。

03 将来へ向けて

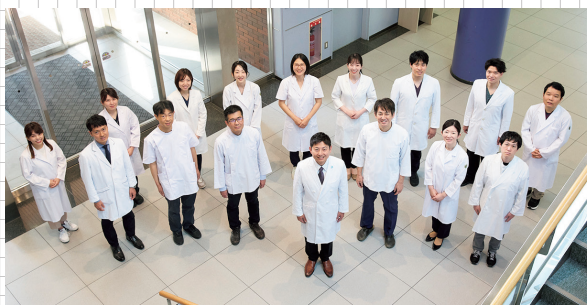
ECMO(体外式膜型人工肺)を必要とするなど重症患者の転院搬送が増加しています。本院の集中治療病棟が広島県の救急集中治療の中心を担えるように活動していきます。またICUの看護師長として、今後の集中治療を担う人材育成を行っていききたいと考えています。



診療科最前線

「皮膚科」

(診療科長:田中暁生教授)



▶ 診療科の特徴

皮膚科は、初代教授である矢村卓三先生をはじめ、2代目教授の山本昇壯先生、3代目教授の秀道広先生、4代目教授の田中暁生と代々アレルギーを専門とする教授によって引き継がれてきました。1999年には山本昇壯先生が中心となって、本邦で初めてのアトピー性皮膚炎のガイドラインが作成され、その後の改訂にも私を含む広島大学病院皮膚科の医師が関わってきました。また、蕁麻疹診療ガイドライン2018は秀道広先生を作成委員長として作成されました。このような背景を基に、広島大学病院皮膚科は、本邦のアトピー性皮膚炎、蕁麻疹、血管性浮腫診療を牽引してきました。また、皮膚悪性腫瘍や重症熱傷の診療に力を入れており、2022年1月には広島大学病院メラノーマ治療センターを開設しました。

▶ 患者さんの動向

難治性のアトピー性皮膚炎、蕁麻疹患者さんの紹介が多く、これらの疾患の患者さんについては広島県内だけでなく県外からも受診されています。また、悪性黒色腫などの皮膚悪性腫瘍の患者さんが多く受診されています。

▶ 得意分野

GA2LEN (the Global Allergy and Asthma European Network) が認定する国際的な研究・教育施設として、UCARE (蕁麻疹)、ADCARE (アトピー性皮膚炎)、ACARE (血管性浮

腫)に認定されています。そのため、これらの疾患の診療を得意としています。また、食物アレルギー、食物依存性運動誘発アナフィラキシーなど皮膚にとどまらないアレルギー疾患の原因検索や治療を得意としています。

悪性黒色腫、血管肉腫、有棘細胞癌等、悪性度の高い皮膚腫瘍の手術を多く行っています。様々な免疫チェックポイント阻害薬や化学療法も得意としています。

▶ かかりつけ医との連携

広島県内の皮膚科開業医や内科医、小児科医からは、皮膚アレルギー性疾患に加えて、水痘症や角化症など、皮膚に症状があればありとあらゆる皮膚疾患の紹介を受け入れています。また、それらの疾患の治療方針が定まれば、逆紹介を積極的にして、連携関係はとても良好です。

▶ 新しい動き

ここ数年でアトピー性皮膚炎や遺伝性血管性浮腫の治療薬の開発は大幅に進み、多くの新薬が登場してきました。また、蕁麻疹の治療薬の開発も進んでおり、今後続々と新規治療薬が登場する見込みです。広島大学病院皮膚科は本邦の皮膚アレルギー疾患診療のアイコン的な存在として、これらの疾患の新規治療薬の治験に多く携わってきました。その経験を生かして、私達はこれらの新規治療薬の治療アルゴリズムにおける立ち位置を明らかにするべく、実臨床における使用成績を蓄積しています。



催しのご案内

(2023年10月~11月)

肝臓病教室

「肝疾患と栄養」

～脂肪肝改善策から

肝細胞癌治療中の食事について～

10月30日(月) 15:00~16:00

会場: 臨床管理棟3階 3F1・2会議室

講師: 栄養管理部管理栄養士 長尾 晶子

申込: 不要(参加費無料)

問い合わせ: 肝疾患相談室

☎082-257-1541 (10:00~12:00 13:00~16:00)

がん治療を支える患者サロン

がん治療と在宅緩和ケア

10月19日(木) 13:30~14:30

会場: 臨床管理棟3階 3F2会議室/Zoom

講師: なんば内科 難波 将史 医師

最新! 臓がんの治療について

11月16日(木) 13:30~14:30

会場: 臨床管理棟3階 3F2会議室/Zoom

講師: がん治療センター医師 岡本 渉

患者おしゃべり会

11月28日(火) 13:30~14:30

場所: 診療棟2階 情報プラザ

申し込み・問い合わせ: がん相談支援センター ☎082-257-1525